

手話コミュニケーションの成立を規定する諸要因の研究

小 田 侯 朗

問題および目的

聴覚障害者は日常生活の中で、いくつかのコミュニケーション手段を使い分け、その障害によってもたらされる困難を克服している。その中で、音声言語としての日本語と異なった表現体系を持つ手段が手話である。語彙、文法性等の点で、コミュニケーション手段としての適切さに問題をのこしながらも、この手段が聴覚障害者、とりわけろう者と呼ばれる人々にとって必要不可欠なものとなっているのが現状である。近年アメリカを初めとして、トータルコミュニケーション法の名のもとに、手話の聴覚障害者に対するコミュニケーション手段としての効果を報告する研究が多数発表され、わが国でもその影響を受け、教育の中に手話を取り入れるろう学校が見られるようになった。しかしわが国においては、ろう教育が開始され、口話法教育の全盛を迎え、徐々に手話法に対する認識が深まりつつある現在に至るまで、手話に関する実証的研究はほとんどなされず、もっぱら教育理念の問題として論議されてきた。本研究は、このように現実に必要なながらも十分な検討がなされてこなかった手話の、コミュニケーション手段としての効果に注目し、手話によるコミュニケーションの成立を規定する要因を明らかにすることを目的とした。

2つの観点から3つの実験が行なわれた。1つは、手話単語の時間的、空間的な配列がコミュニケーションに及ぼす影響であり、もう1つは、特定の手話単語に対する認知の違いがコミュニケーションに及ぼす影響である。前者は実験1及び実験2で検討され、後者は実験3で検討された。

実験1

目的 個人内及び個人間での、手話表現の規則性を検討する。

方法 被験者は3才未満に失聴した23才～25才の成人ろう者4名(うち女性1名)。課題は、Schlesinger(1971)の用いた、「人が熊に猿を渡す」という内容を初めとして、この3者の可能な関係6通りを絵画にして表わした課題を、それぞれの単語とその役割を記入した3枚組のカードに替えたものであった。内容は、「人」「熊」「猿」

の具体的な行為を表わすものと、「権利」「規則」「経験」の抽象的な関係を記述したものの2つが用意された。さらにその状況の中心となる単語を指定した、コメントカードがつけ加えられた。

被験者には、3枚組のカードと1枚のコメントカードが呈示され、3枚組のカードの内容を手話で表現することが要求された。2課題それぞれ6通りが、3枚のコメントカードと組み合わされ、計36試行の手話表現が行なわれた。被験者の手話表現はすべてビデオテープに録画され、語順と表現位置の2点について分析が行なわれた。

結果及び考察 4人の被験者すべてに共通した語順及び位置の表現規則は認められなかったが、各個人内では一貫した表現規則が認められた。これらの表現全体を通して、2つのことが明らかにされた。まず、ほとんどの被験者の手話表現において、状況を規定したコメントカードに対応して、文頭の単語が変化したことから、手話は、より文脈に依存する言語であり、その単語の持つ役割にかかわらず、状況の中心になる単語が文頭に表現される傾向があるといえる。次に、具体的課題と抽象的課題の2課題が用意されたのだが、各被験者はそれぞれ独自の方法で、この両者の表現を区別しており、同一の関係を表わす内容でも、それが具体的な単語で構成される場合と、抽象的な単語で構成される場合とでは、表現が異なることが明らかにされた。前者の場合、行為(役割)はその行為主である単語に従属するものとして表現され、独立した1つの概念として表現される傾向があった。

実験2

目的 正確なコミュニケーションを成立させるために適切な、手話の語順及び表現位置を検討する。

方法 被験者は手話講習会の受講生。実験は2回に分けて行なわれ、1回目82名、2回目57名(うち10名のろう者群を含む)。被験者は手話学習経験の長さにより、初心者群と上級者群に分けられた。

実験1で録画された3名のろう者の手話表現の中から、それぞれ6項目の計18項目が読み取り課題とされた。被験者には12枚の絵画(課題A、課題Bそれぞれにつき6枚)が、2枚の紙に印刷された。そしてこの絵画の中か

ら、ビデオ呈示される手話項目の内容と一致すると思われるものが、被験者によってそのつど選択された。

結果及び考察 3名のろう者の手話表現について読み取りが行なわれたのだが、その読み取り正答率を比較すると、2名に対する読み取りが9割台の正答率であったのに比べ、のこりの1名に対する読み取りが38%の平均正答率を示した。前者2名と後者との表現上の大きな相違は、空間的表現の有無であった。後者は、それぞれの単語の表現位置を明確に区別することで、単語間の関係を視覚的に理解させる方法をとった。このことは、手話のような視覚的表現手段の場合、語順以上に表現位置の工夫が、コミュニケーションの正確さを規定する要因になることを示すものといえよう。

また、被験者の側にも、表現規則に対応する読み取り規則があると仮定して分析を進めた結果、「AがBをCに渡す」という日本語の語順にそって、手話を読み取る傾向が認められた。被験者の側の要因と思われるものにもう一つ、具体的課題と抽象的課題の読み取り正答率の差があげられる。1人のろう者の表現において、課題A、B間に相違が認められなかったにもかかわらず、その読み取りに差が見られたことは、手話の読み取りが、単にその表現のみに依存するものではないことを示すものである。

実験3

目的 個別的な模倣としての意味と、一般概念としての意味を兼ねそなえる手話の認知と、コミュニケーションの関係を検討する。

方法 被験者は手話講習会の受講生82名（実験2における1回目の被験者に同じ）。

個別的な模倣としての意味と、一般概念としての意味を兼ねそなえる手話単語により構成された、4種類の手話課題が用意された。この課題中の個々の単語を、どのように認知するかによって、課題の示す内容が異なる。被験者には、この認知の違いによって考えられうる、いくつかの可能な課題の内容を絵画に表わし、数枚の紙に印刷したものが手渡された。被験者は、ビデオ呈示された手話課題を観察したのち、手渡された絵画を、手話課題の内容に一致すると思われるものと、そうでないものに分類した。被験者の反応はいくつかのカテゴリーに分類され、分析された。

結果及び考察 被験者は、手話の学習経験の長さとして、実験2での読み取り成績の程度で、それぞれ2群に分け

られ有意差が検定されたが、どちらの場合にも差は認められなかった。しかし、それぞれのカテゴリー出現率を比較すると、手話の学習経験の短い者は、課題の手話を個別的な模倣と認知する割合と、一般概念と認知する割合がほぼ同程度であるのに対し、手話の学習経験の長い者は、それを主として一般概念と認知するという傾向が見られた。また、読み取り成績で2分された被験者間の比較では、全体としては、成績の悪い者が上記の学習経験の短い者の型に対応し、成績の良い者が学習経験の長い者に対応したのだが、その差はより小さく、一部のカテゴリーでは、一貫して逆の傾向を示した。これは、手話の学習経験を積むことにより、手話を模倣から切り離し、一般概念を表わす言語であると認知するようになるが、このことが即、読み取りの能力を上昇させることにはならないことを示すものであろう。

全体的考察

3つの実験を通して、手話によるコミュニケーションの成立を規定しているいくつかの要因について論じてきたのだが、再度要約するならば以下のようなものである。

手話の表現は個人によって異なるが、それぞれの表現は独自の規則性を持つ。ここからいえるのは、手話が、より文脈に依存する言語であり、また模倣をその基本にしているため、具体的内容と抽象的内容の表現に違いが見られることである。この表現をコミュニケーションの観点から見ると、語順以上に表現位置を区別してそれぞれの語を表わす、空間的表現が効果的である。手話表現の規則性がコミュニケーションに影響を与えるのと同時に、読み取り手の認知もまた大きな影響を与える。健聴者の場合、日本語の語順が少なからず、手話の読み取りの際に影響を及ぼしており、また対象となる手話を、個別的な模倣と認知するか、一般概念と認知するかも、読み取りの正確さを規定する要因の一つである。また、表現としては同一でも、それを構成する語が具体的か抽象的かによって、読み取り易さが異なるのは、手話によるコミュニケーションを考えるうえでの、基本的問題点の一つといえよう。

本研究では、これらの要因が重要な働きを示す事を述べることができたが、個々の場面で具体的に、コミュニケーションの成立にどのような影響を与えているかについては十分検討できなかった。今後はこれらの要因の一つ一つを、詳細に検討してゆくことが必要と思われる。